

2007年6月

発行 大阪大学山岳会

〒565-0871 吹田市山田丘2-1

大阪大学大学院工学研究科

地球総合工学専攻 大野研究室内

TEL 06-6879-7635

FAX 06-6879-7637

OUJMC

部間協力とOBの支援を

現役山岳部の活路

大島 輝夫

大学山岳部員の減少がとどまるところを知らない。阪大山岳部も4月はたった1人のスタートであった。若者の山岳部離れは時代の流れで、ある程度止むを得ず、東京の大学は日本山岳会学生部に活動の場を求めている。関西でも今年は4大学が西チベットに合同登山隊を送るなど、大学間の協力を模索する動きが出てきた。こうしたなかで阪大山岳部を存続させ、山岳部の歴史と伝統を伝えていくために我々はどうすべきかをみんなで考えたい。



ななかで阪大山岳部を存続させ、山岳部の歴史と伝統を伝えていくために我々はどうすべきかをみんなで考えたい。

毎日新聞は、今年2月の毎土曜日、「変容する登山界」と題して数回の記事を連載した。2月10日の記事は「部員1人で奮闘」の表題で立教大を取り上げた。

「現在の部員は、3年生の小山さやかさん1人だけだ。(中略)70年ごろまで20〜30人の部員数を保つてい

た。その後、低落傾向が続いており「1人部員」も今が初めてではない。(同)立大に限らず、伝統校の多くは部員数がひとけただ。(同)現状では海外遠征は不可能に近い。そこで、参加したのが日本山岳会で組織する学生登山隊だ。小山さんは昨秋、そのメンバーとしてネパール・ヒマラヤの未踏峰(6887m)へ、本格的な高所登山の経験がない他大学の5人と登頂した。日本山岳会は、大学の部員が海外の登山を経験できないことを懸念し、数年に一度、大学をまたいだ隊を結成する。(同)部継続の危機にたつ中、小山さんは「(新年度は)1年生の雪山への抵抗をより少なくしたい」と話し、孤軍奮闘で正念場に臨む」とある。

東京の多くの大学山岳部の部員数はひとけたである。日大の6〜7人は多いほうで、東大は4人、一橋は一昨年に聞いた話では、2人いる部員がともに留学生だという。

こうした状況のなか、日本山岳会学生部は昨年、マナスル北西に位置

するパンバリ・ヒマールに5大学6名から成る登山隊を派遣して初登頂を成功させた。この隊には中央大学OB1名のほかは、いずれも現役の専修2名、立教、千葉各1名、関西からも関学1名が参加した。同学生部は毎年、皇居外苑マラソン大会も開催しており、昨年11月には15大学82名が参加したそうだ。走行距離は個人戦が男子15km、女子10kmで、団体戦は5km×4名で行われている。女子個人の優勝は前述の立教の小山さんであった。

また、少し前の話になるが、日本山岳会科学委員会が2000年まで11年にわたってアラスカ・マツキンリー(6194m)の冬季における風速、気温、気圧などの定点観測を続けた際、毎年6月ごろ、デナリ・パス上部5、715地点に設置した観測機器の取り替えや観測データの回収を学生部、青年部の人らが担当し、登頂もしている。この定点観測はその後、アラスカ大学に移管されたが、日本山岳会のヒマラヤ遠征隊員養成、高所順化に貢献した意義は大きい。

私がかねがね、部員が減少すれば、各大学が協力して行動すべきであると主張してきた。

その先例が、昭和4年、当時、大阪医科大(阪大医学部の前身)の学

生であった水野祥太郎先生が京大の高橋健治氏と協力して組織した関西学生山岳連盟で、戦前から各大学が協力して海外遠征をしていた。連盟報告7号/1936には、5月の北千島(同志社、関学、東京歯科医専)、12月の済州島・漢拏山(京大OB、浪高、関大、京都薬専)、7月の小長白山(同志社、浪高)の報告が掲載されている。各大学が単独では難しい遠征を協力して実施していたわけである。

水野先生は戦後も学連に愛着を持っておられ、私も戦後の復活に努力し、ガリ版刷りの「時報」を発行したりした。ところが、学連はその後、各大学の部員数減少の中で自然消滅してしまった。

私は、関西の大学山岳部OBに会う機会があるごとに、学連の復活、それが難しければ日本山岳会関西支部に学生部をつくることをお願いしてきた。日本山岳会学生部にも、東京だけでなく、全国の大学を対象にすることを要望してきた。そんななか、最近、関西支部に学生部をつくる動きがあるとの話を聞いたが、まことに喜ばしいことである。また今年、西チベットに同志社、関学、甲南、近畿各大学の現役10名とOB2名から成る登山隊を送るとのことである。残念ながら阪大の名前はな

いが、これが今後の関西各大学山岳部の協力のきっかけとなることを期待したい。

各大学の部員が減るなか、同志社は部員17名と健闘しているが、これは山岳部の性格を変えたことによる成果だそうである。OBの平林克敏氏(日本山岳会登山隊のエベレスト登頂者、前日本山岳会副会長)によると、新入部員募集の際、山スキー、人工登攀、ワンダーフォーゲルも対象にしたところ、たちまち入部者が増えたそう、人工登攀を目的に入った部員の中にも3、4年経つうちに「山に行きたい」と言い出す者も出てきたという。

「ヒマラヤの高峰も登り尽くされ、若者が情熱を燃やす目標が少なくなった」との声も聞くが、会社を定年退職後、東チベット地方の踏査に力を注ぎ、2003年に日本山岳会の秩父宮記念山岳賞を受賞した一橋OBの中村保氏によれば、東チベットには6000級以上の未踏峰が約300はあるとのことである。ネパールも含め、まだまだ魅力のある山々、初登頂の目標は残っている。

部員の少ない山岳部が活動を続けていくうえで、いまひとつ欠かせないのはOBの支援である。

阪大山岳会の記念誌「後立山からヒマラヤへ」を呈した関学OBの

尾崎進氏は、松尾敬志君の「山岳部中興の記」などの記事に感激した、との手紙を私に寄せている。事実上2名の部員で存続さえ危ぶまれた部が、新人の増えた夏合宿をOB8名の応援を得て成功させ、息を吹き返した、との内容などによるものである。

時代が変わったとはいえ、山岳部の活動が活発な各大学は、それぞれ

上高地の「山研」へも 夏の白馬集会

2006年度の夏の白馬集会は8月26日から長野県白馬村八方の「ホ

優れた指導者が現役を指導しているように思われる。阪大山岳部でも近年、OBの協力なしに合宿運営がでない状態が続いており、大学院に進む若いOBを含めた組織的な支援策をもっと考えるべきだろう。これに加えて他大学と協力しながら新しい道を探っていく以外に活路は残されていないと思う。

(評議員、1952年理学部卒)

テル対岳館(丸山庄司館主)で開かれ、同伴家族を含む15人が参加した。初日は夕食のあと、例によって別棟の「与兵衛倶楽部」へ移動。丸山館主が同倶楽部で保存している日本の登山記録などを囲んで夜遅くまで歓談が続いた。

2日目は、朝の

うちで集会はひとまず解散。日本山岳会の上高地山岳研究所(通称・山研)へ向かう6人前では、松本駅前で自炊用食料を調達して上高地に入った。山研行きは阪大卒業生が管理人を務めていることが分かったため、夜は、西川元



夫会員が同伴した大阪山の会の大西保氏（関大OB、日本山岳会関西支部西チベット学術登山隊長）を交えて懇談した。

3日目は、対岳館に残ったメンバーが参加して恒例の懇親ゴルフ大会が安曇野市の穂高カントリークラブであった。

出席者は次のみなさん。（会長以外は卒業年次順）

大野義照▽大島輝夫▽田島汎▽川島勇▽山本光二▽三枝礼子▽木村裕一▽坪井和子▽兼清喜雄▽野田憲一郎▽前澤祐一▽高田邦雄▽山田靖則▽西川元夫、木原秀幸（上高地のみ）



OUMC新年会

2人の現役部員囲んで

OUMC新年会

本会の2007年新年会は2月1日夕、大阪市北区の阪大中之島センター（旧歯学部跡）で開かれ、現役部員2人を含む18人が出席した。

大野会長は、あいさつの中で、現役部員が2人しかないということから、2人を切ると、体育会加盟のクラブとして認められなくなる。また、日本山岳会関西支部から学生部設立について協力要請が来ている」と話し、現役側からは合宿について簡単な報告があった。

出席者は次のみなさん。（会長以外は卒業年次順）

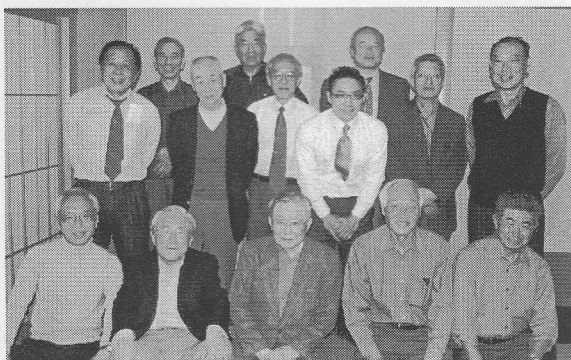
大野義照▽田島汎▽堺谷弘▽山本光二▽三枝礼子▽木村裕一▽空中勝▽関本靖裕▽辻川眞▽岡田博司▽石澤命久▽五百蔵弘典▽木原秀幸▽高田邦雄▽山田靖則▽大宅幸夫▽網野善久、三十尾誠（現役）

東京支部だより

大野会長も特別参加

にぎやかに新年会

OUMC東京支部の2007年新



東京支部新年会

年会は2月23日夕、東京都千代田区のとヨタ九段ビルで開催され、大阪から特別参加した大野義照会長はじめ会員14人が参加した。

恒例の近況報告では、仕事や山の話はもちろん、最近の出版物や家族、趣味……と幅広い話題が満載で、若輩者にはとても興味深い内容でした。そして、「今年はもっと山に行くぞ!」との決意表明があり、例年通りワイワイガヤガヤの会となりました。

大野会長以外の参加者は次のみなさん。（卒業年次順）

大島輝夫▽宮本貞雄▽樋下重彦▽野田憲一郎▽山本信樹▽兼清喜雄▽前澤祐一▽米澤成二▽横尾秀次郎▽原治左衛門▽出雲路敬孝▽田中喜樹

▽光永正樹

◇
なお、東京支部の2006年の山行は次の通りでした。

3/4 三浦半島縦断偵察・佐島—六浦18キロ—前澤、横尾、出雲路、糸井（取りまとめ・横尾）
4/8 三浦半島縦断・六浦—秋谷35キロ—同（同）
5/4 日光白根山・丸沼—日光湯元—野田、田井、前澤、横尾、出雲路、石原（同・前澤）
11/26 三ツ峠山—霜山—天井山—野田、米澤、前澤、横尾、出雲路、石原（同・出雲路）

（文責・光永）



日光白根山・頂上直下で

台湾の谷歩き満喫

大宅 幸夫

台湾は九州よりも小さい島なのに、

3000以上の級山岳の続く脊梁山脈が東海岸から急激に立ち上がっている。

そのため、谷は深く切れ込み、急峻な側壁を形づくっている。今回、私たちは、南部の高雄の東方、屏東縣を北に

遡っている「老濃溪」の支流「隘寮北溪」のさらに支流である「番國拉次溪」という谷を遡

ってきた。谷は素晴らしく、メンパー、天候に恵まれ、大変楽しい5日間だったので、ここに報告したいと思う。



台湾の山岳に入るには入山許可証と中華民國登山協會のガイドが必要だ。このため、諸手続きと現地での移動など世話一切について、台湾に遡溪協会なる組織を立ち上げた日本人グループ「海外遡行同人」の方々と中華遡溪協会、彰化縣登山協會の方々の献身的な援助を受けた。その同人4人と私の5人が連れだって昨年12月29日に台北へ発った。そして30日は高雄まで高速ノンストップバス。そこから3人の

台湾メンパー(うち女性2人)を加えた総勢8人が彰化山岳救助隊の江さんの車に乗り込み、三地門というところから山岳地帯に入った。



魯凱族の村。正月の飾り付けをしている

三地門で入山許可証を見せ、霧台へ向かう。霧台村については茂林国家風景区ホームページに詳しく載っているが、原住民族の文化保護区に指定されていて、魯凱(ルカイ)族の文化と暮らしが保護されている。この地域に入るには山地経営管制区入山証という

が必要で、今回は中華遡溪協会の莊再傳先生の手を煩わせた。霧台から500以上の谷底の下大武へ下り、「拉瀑灣山莊」で泊まった。この山莊は板状の粘板岩を積み重ねた壁で造られていて、独特の雰囲気がある。

出発した翌日は大晦日だったが、

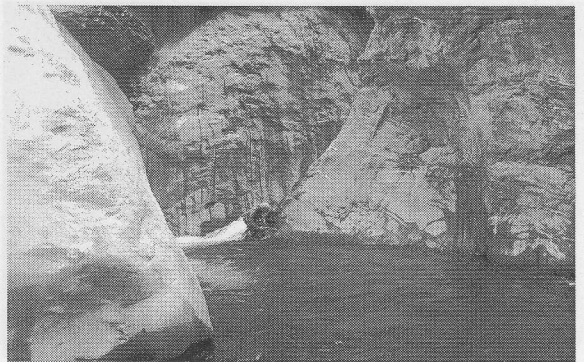
モルモン教の村ということで、断崖に立つ教会から大音響の説教が流れ、あちこちに五芒星が輝いていた。魯凱の人々は南方系の浅黒い顔立ちで、瞳がぱつちりと大きい。体軀はずんぐりしていて、中国系の人とは違つ、親しみやすさがある。

【1日目】

まずは隘寮北溪の広い河原を徒渉を繰り返しながら進む。3時間ほどで目的の「番國拉次溪」出合に着いたが、驚愕した。近づくまで見えなかったのも道理。両側から塀のような尾根が迫り、閉ざされた門の隙間に20以上の滝が落ちているといった感じだ。「え! どうするの?」と見ると、左岸の壁上部にロープが垂れている。そこしかルートがないのだ! 全員が谷に入るのに3時間近くかかった。そこからは側壁が2000~3000以上の立っているものの圧迫感はなく、楽しい遡溪2時間ほどで良い泊地があった。

【2日目】

右岸の3000以上の壁から派生する尾根に沿つて小滝が続いたが、そのうち



突破に3時間かかったZ型のゴルジュ

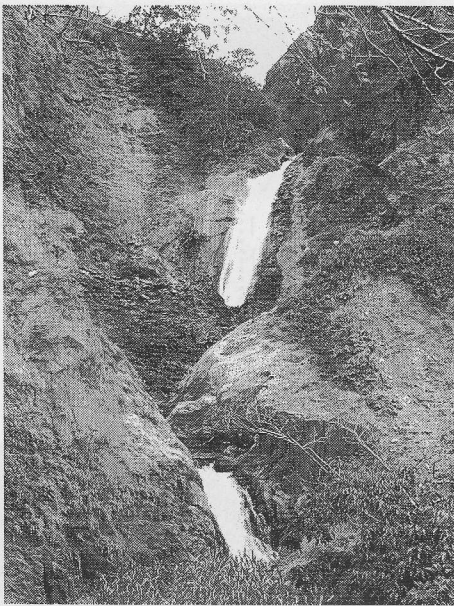
谷が開け、目の高さに滝が見えた。最初の大滝40以上! 近づくにつれて滝の前面に奇怪な形の岩が両岸から出ている。薄い尾根を流れがぶつた切つて稲妻形に裂けたという感じで、その向こうに滝がかかっている。ここは右岸を巻き、懸垂で谷に戻る。その後、大きな崩壊地を過ぎ、淵を泳いだりした(この淵で1人がカメラをなくした)あと、谷はS字状に曲がり、大きな釜に約10以上の斜瀑が落ちている場所が通過できない。ボルトを埋めたりして尾根に上がり、懸垂2回でS字状の上の河原に下り、泊となる。

【3日目】

この日は出発後30分で大変な所に出た。3000以上の壁に当たつて谷は

左折しているのだが、曲がり角に大岩があり、その裏の釜に、見えないゴルジュから激流が噴出して渦巻いている。今回のチームには沢の名人がいるので心強いが、大変なところである。

この釜を泳いで、激流横の壁の基部に上がり、左岸の壁を強引に巻いて越えたが、出発から3時間が経っていた。この後しばらくで右から大きな谷が入って開け、左右の稜線が合するところに40呎の大滝が堂々と落ちて見えた。やがて両岸が立って行き止まりになり、見上げると大滝は見えないが、3つほど滝が見える。昼食後、右岸の急な尾根を高巻いていくと大滝の全谷が見えた。なんと、壁の真ん中から大滝が落ち、その下に両岸から衝立のような尾根が交互に派生している。流れは鋭角に4回も曲げられ、角ごとに滝がある。すごい景観だ。3時



奥の大滝

点線の道は少し先だが、もう時間がないので尾根に取り付き、途中のぼる壁で時間を食ったが、無事に林道にたどり着いた。林道は4年ほど前の台風でずたずたになり、廢道になっていたが、なんとか

間の高巻きの後、懸垂で滝の上流に下り立った。ここもまた良い泊地だ。

【4日目】

前日に大滝を越えたので気分的にゆとりができ、この日も泳いだり、へつたりで、奇怪な粘板岩の造形を楽しんだ。そして、もうすぐ地図上で点線の獵師道と出会い、それを辿って林道に出れば予定終了ということ、ゆつくり昼食を取り、歩き出した。ところがそこへ、全く通行不可能な15呎のぼろぼろの壁を、塀を乗り越えるようにして越えたが、上から見ると滝上も強烈なS字状ゴルジュだった。降り立った滝上の砂地で泊となる。

【5日目】

前日、ルート工作しておいた右岸の尾根に上がり、そのままゴルジュ帯を高巻き、懸垂で河原に下り立った。

地元獵師の踏み跡が続いていた。暗くなつた夕刻6時に阿禮(アーリー)から2ヶ地点まで強引に迎えに入ってくれた江さんの車に会い、終了。林道の途中で阿禮の獵師に出会ったが、2人は19世紀の写真から出てきたような風貌、いでたちであった。霧台で原住民の長(おさ)の住居を見学し、そのまま高雄まで送ってもらい、夜行バスで彰化まで行き、彰化登山協会の方のマンションに泊めてもらった。

【追記】

翌日はアルコールゴルジュであった。昼過ぎから彰化登山協会の方や中

華民国登山協会の方たちの歓迎を受け、「乾杯!」の連続。前後不覚のまま夜行バスで台北に戻り、ホテル泊。翌日には帰阪した。私としては初めての台湾行で、慌ただしい8日間だったが、いつまでも興奮冷めやらず、素晴らしい体験をさせてもらったことに感謝、感謝だ。

(1976年歯学部卒)

◇ 「海外週行同人」道上氏のホームページのURLは次の通り。

<http://158.aaalivedoor.jp/~kymbs/else/lan>

<http://kyoukokujai0612.htm>

(台湾 番國拉次溪)でも検索可)

予期せぬ大自然に感動

アイスランド紀行

岡田 博司

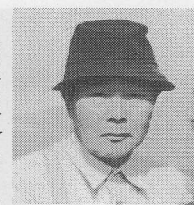
過ぎ去った昔を振り返る時、多くの山行の中でも特に思い出深い山行が誰にもあるだろう。必ずしも高い山ではなく、また、成功した山行とは限らないかもしれない。その意味で、単なる観光旅行ではあったが、予期しない大自然に接し、目の覚めるような経験をさせてくれたアイスランド旅行は僕にとって忘れがたいものだったので、簡略に報告し、会員諸兄姉にもお勧め

したいと思う。

2005年春ごろ、阪急交通社が10日間35万円で募集したツアーの客がなかなか集まらず、ようやく福井、名古屋、三重、滋賀、大阪、神戸、倉敷、広島からの総勢12名で成立した。集まったのは、世界中行き尽くしたような旅慣れた人たちがばかり。アイスランド島内を一周し、北部、東部、南部もくまなく見せてくれるツアーは初めてだ

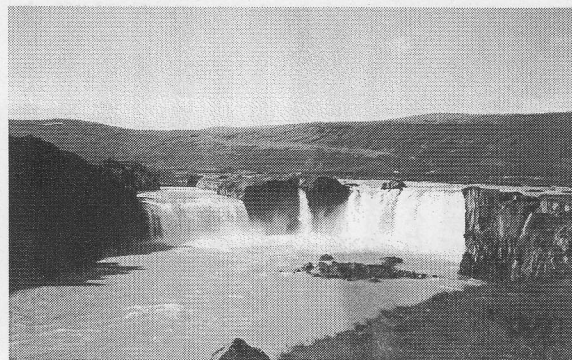
から参加した、と言う人もいた。

僕にもそれは分かっていた。アイ
スランド紀行の名著であるウイリア
ム・モリス（英、近代デザインの父）



の1871年の
記録や、リチャ
ード・ロング
（英、現代美術家）
の写真作品など

も島の西半分のものだけだった。東部
には欧州最大の氷河ヴァトナヨークト
ル、最大の滝テイフォスや大小のフ
イヨルド群がある。山は、最高峰のク
バンナダルスフォニユークルが2、1
19日で、2番目のスナイフエツト
ルは約1、800日だ。
主な旅程は次の通りだった。



ゴーザフォスの滝

7月6日 深夜にレイキャヴィー
ク着。

7日 鯨のフィヨルド、牡羊のフ
イヨルドを経て、真夜中の太陽の町ア
ークレイリ泊。

8日 ゴーザフォスの滝、ミール
アトン湖と地学の諸現象に驚きなが
ら、レイダルフィヨルズ泊。

9日 エイイルスタデイルの街
や森林公園、博物館を見て、ブレイダ
ルスヴィーク泊。

10日 アルマンナスカルズ岬から
ヴァトナヨークトル氷河を初めて眺望
し、ヨークルサルロン氷河湖のクルー
ズ後、ヴィーク泊。

11日 シングヴェトル国立公園
を中心に「ゴールデンサークル」と称
される観光の定番地域へ。特に感動し
たのは、大地の裂け目がユーラシア
プレートと北米プレートを生成している
「ギャウ」という場所で、その狭間で
930年に世界最古の民主議会が開か
れたという。ここにはアイスランドの
原点となる精神が今も息づいているの
を感じたのだった。

12日から14日はレイキャヴィーク
市内外で多くの経験をした。全人口が
約30万人に過ぎないのに、世界の中
の存在感は輝いている。自然条件、人
の条件に則して質実剛健に生きている
という印象で、日本人である僕などは
つい考えさせられたものだ。

現在、アイスランドを秘境とは言
えないが、山に憧れたことのある人た
ちを夢中にさせてくれる島であること

大阪大学山岳部
活動報告
2006年度

リーダー所感

網野 善久

新入部員がおらず、2006年度
も現役部員2人だけの山岳部となっ
た。また、3年生部員がいなかった
ため、2年連続で私がリーダーを務めること
になった。

そのことに関して気がついたのは、
体力的にも精神的にも3年生の存在は
大きいのではないだろうかということ
だ。ある程度の経験と体力的な基礎の
できた3年生は、これから自分らしい
山をやっていききたい、と思うようにな
っているはずである。そんなモチベ
ーションの高い部員がトップを歩いて、
パーティーを引きずり回すぐらいの迫
力を示してくれたら、と何度か思った。

は間違いない。

(1958年法学部卒)

しかし、いない者はいないので、その
役を現役部員2人でうまく分担できた
であろうかと思うと、反省させられる
ことが多い。

少人数であるがために、やむを得
ず個人的な山行を別々に行うことがあ
った。例えば5月山行は、私はOBと
ともに劔岳へ行き、三十尾は知人とフ
リークライミングに行くといった具合
であった。また、人数が少ないと、や
はり向上心、モチベーションを維持す
るのが難しくなる。身近に切磋琢磨で
きるライバルがいることの大切さを考
えさせられる。その意味では、三十尾
につまらぬ思いをさせ続けたように感
じている。しかし、部員が内部にいな
いなら、外部に求めることもできたと
思う。積極的に他大学との合同山行や
連携を行ってい
れば、と悔やま
れる。



前年と特に異
なると思われる

山行は御岳アイゼン合宿、八ヶ岳冬山
合宿である。前年は冬にフリークライ
ミングをすることになっていたので、
アイゼン合宿をしなかった。しかし、
御岳では滑落事故を起こし、八ヶ岳で

は凍傷を負った。いずれの山行でも何らかのハプニングがあり、いろいろ考えるきっかけを与えてくれた。

私はこれで大学山岳部からは引退となるが、山からの引退はまだまだ先だと思っている。今後も機会あるごとに新しい山に挑戦していきたい。

【現役メンバー】

網野善久 理学部生物学科4回生
三十尾誠 理学部化学科2回生

【山行概要】

3月 伊吹山／雪上訓練

5月 個人山行／劔岳—小窓（網野）

同／長野県・小川山ボルダリング（三十尾）

8月 夏山合宿／劔岳・真砂沢

9月 白馬岳—朝日岳縦走（三十尾）

11月 冬山偵察／八ヶ岳・阿弥陀岳南稜

12月 冬山合宿八ヶ岳・阿弥陀岳南稜

.....

◆3月山行／伊吹山

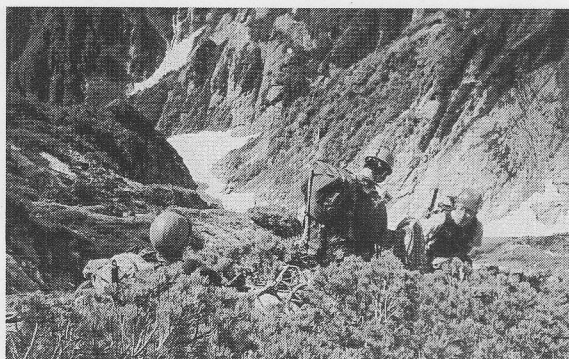
【期間】 3月19日帰り

【参加者】 網野、三十尾

登山口（9・00）—伊吹山頂上（12・30）—雪訓（14・00）—登山口（16・00）

網野の研究室の都合もあり、予定した八ヶ岳縦走ができなくなった。やむを得ず、せめて雪上訓練だけでも伊吹山へ日帰りで行くことにした。大阪を朝6時に出発して登山口には9時に到着。スキー場の営業は終了しており、人気はほとんどなかった。

5合目までは雪がなく、眼下に広がる田園風景がきれいであった。伊吹山周辺が戦国時代の要衝であったことを考えると、この山に登って戦略を練った大名がいたかも知れないと夢想した。5合目からは膝下までの積雪。キツクステップが快適に決まるサクサクした雪質であった。途中で3パーティークらいとすれ違った。稜線に出ると、独立峰だけに風が強い。頂上に到着す



夏山合宿 八ツ峰下半

ると、それまでかかっていた雲が切れ、北側の眺めが飛び込んできた。幸運であった。風がかなり強かったため、景色を楽しむ余裕もなく、早々と下山開始。途中でロープワーク、支点作成の練習をして下山。

時刻表によると、バスが来るまで1時間待たねばならなかった。近江長岡駅まで歩くことに。ところが道の間違え、2時間以上歩き回ることに。途中から降雪。日も暮れてしまった。こういう土地に住む人たちはあえて雪山に登ろうとはしないのだろうな、と思わせるほど吹雪いた。

大阪から3時間であんなに良い山があるとは、と改めて思った。

◆5月山行／劔岳—小窓

【期間】 5月3日～6日

【参加者】 網野、越智OB

3日 敦賀（6・00）—立山（9・00）

敦賀駅で待ち合わせをして越智OBの車で立山駅駐車場まで。きわめて快適だった。

4日 立山駅（7・00）—室堂（9・00）—劔沢（12・00）

今年は積雪が多いので翌日早朝に源次郎尾根に取り付くことにした。ゴールデンウィークだけあって、室堂は大盛況で、人が多かった。別山乗越までの登りは相変わらずしんどかった。

しかし、この登りで人の付けたトレースを辿らずに自分のキックステップで登っていくと山に体がなじむような気がする。個人的には好きである。眺めも天気も良いし、この日は劔沢までだし、快適。

劔沢で、源次郎から帰ってきたパーティに状況を聞いた。劔沢から見ると、それなりにプレッシャーを感じるが、「トレースはつちりて、階段みたい」とのこと。核心部は1峰の下らしい。網野はかさばるからとシユラフを持って来なかった。行動中は荷物コンパクトでいいのだが、当然、夜は極めて寒かった。

5日 出発（5・30）—劔頂上（10・00）—小窓（14・30）

明るくなると同時に出発。源次郎にはすでに3パーティが取り付いていた。1峰へは急傾斜を登っていく。下を見るとゾツとした。稜線は途中かなり細いところがあり、強風が来たら危ないだろうと思った。トレースに感謝しながら歩いた。1峰の下りが本当に核心であった。細かい、クライムダウンだしということに恐る恐る下った。この後、2峰の懸垂下降ポイントで1パーティ待ち時間があつたが、快適な雪稜登行であった。

劔岳北方稜線は僕にとって未知の領域であった。一般名詞的な名前が異様な感じを与えるし、またどこか最果

ての地のような暗く切ない神秘的な雰
 囲気をかもし出している、と勝手に想
 像していた。この想像はそれほど外れ
 ていなかった。池ノ谷ガリーの下りは
 怖かったが、三ノ窓、小窓ノ王の景色、
 雰囲気は格別であり、山の楽しさが凝
 集されていたように思う。三ノ窓でチ
 ャネを眺めながらお茶タイム。三ノ窓
 は最高である。途中、鹿島槍ノガンド
 ウ尾根ルート来たという2人パーテ
 ーと会った。彼らのまるで旅行して
 いるかのような爽やかさが印象的だっ
 た。小窓で行動終了。

6日 小窓 (6・00) — 馬場島
 (10・00)

小窓から西仙人谷を下って馬場島
 まで。デブリが堆積していた。小窓を
 振り返ると、逆光が沢を幻想的なもの
 にしていた。

越智OBには毎回、山の素晴らし
 さを教えてもらっている。今回も大変
 お世話になった。赤谷尾根、小窓尾根
 など次の目標ができたという点でも充
 実した山行であった。

◆ボルダリングツアー (三十尾)

【期間】 5月2日〜7日

5月連休は、我がままを言って、
 知人達の企画した長野県・小川山ボル
 ダリング (ロープを用いずに、低い岩
 壁で行なう岩登り) ツアーに加えても
 良かった。参加メンバーは入れ代わりな

がらであったが、一時は車5台が連な
 る大ツアーとなった。ロープクライミ
 ングのエリアも近くにがあると聞いたの
 でロープも持っていったが、結局、出
 さずじまい。ひたすらボルダリングに
 取り組むこととなった。ツアー全体を
 通して、これといった成果はなかった
 ものの、岩を満喫することができ、満
 足のいく4日間であった。

2日 出発

3日 小川山

早朝、廻り目平キャンプ場到着。
 設営し、休息をとった後、岩に取り組
 む。この日は何本か登りきった。

4日 小川山

朝は冷え込んだ。昼間の暑さとの
 ギャップが激しいのには参る。この日
 は結局、完登はなし。先行メンバーは
 この日のうちに小川山を登ち、あるク
 ライマーのお宅に宿泊させてもらう。

5日 山梨の未発表エリア

朝食まで御馳走になったあと、エ
 リアの開拓者である氏の案内で林の中
 を回る。ここでは人で賑わう小川山と
 はうってかわって静かな環境が得られ
 た。

6日 早川

この日は河原にあるエリア。川沿
 いに磨かれた大岩が立ち並ぶ様子はな
 かなか美しい。前3日間のざらざらと
 した岩質とは違い、のつべりとした岩
 質に特徴がある。指の皮を酷使した後

にはちょうどよい。

7日 帰阪

.....

◆夏山合宿/剣岳・真砂沢

【期間】 8月14日〜19日

【参加者】 網野、三十尾、寺田 O

B、尾崎OB

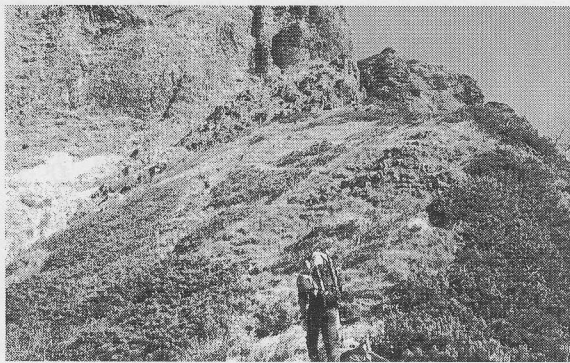
14日 (晴)

室堂 (9・00) — 剣御前小屋
 (12・00) — 劔沢山荘 (13・00) — 真
 砂沢 (15・30)

15日 (晴) 遠足

BC (5・20) — 二股 (6・40)
 — 三ノ窓 (10・50) — 池ノ谷尾根の頭
 (12・15) — 本峰 (13・50) — BC
 (16・50)

雪渓の状態などの偵察をかねて遠



冬山偵察 阿弥陀岳南稜

足へ。三ノ窓雪渓の取り付きで目の前

の雪渓が崩壊したので、雪渓はアンザ

イレンして通過することにした。上部

に行くに従って雪渓の状態が悪くなっ

ていた。そこで、途中から三ノ窓尾根

に乗ることにした。尾根上は小じんま

りしたお花畑が続いて、眺めもよく、

気持ちよかった。そのまま本峰を経

由して平蔵谷を下り、BCへ。

16日 (晴) 八ツ峰VI峰Dフェー

ス富山大ルート

BC (4・30) — 取り付き (7・
 30) — 登攀終了 (11・30) — BC
 (14・30)

網野、三十尾、尾崎OBの3人で。
 好天の下、高度感、景色ともにすばら

しく、最高の条件でクライミングを楽

しむことができた。下降はVIの科尔

に降りたが、個人的にはそのときの八

ツ峰の開放感が印象的であった。BC

に帰ると、寺田OBが来ていた。

17日 (晴) 八ツ峰下半縦走

BC (4・00) — 取り付き (5・
 30) — 稜線上 (9・00) — VIの科尔
 (12・20) — BC (14・30)

取り付きから稜線上へ3級程度の
 フェースをひたすらノーザイルで登り

続けた。高度感、緊張感が心地よかつ

た。登りきったところはI峰であった。

VIの科尔まで懸垂下降を交えながら

縦走。

18日 (晴) 樺平を目指して

出発 (4・30) — ハシゴ谷乗越 (6・40) — 内蔵助平 (8・20) — 黒部ダム・下ノ廊下分岐 (11・30) — 崩壊地 (16・15) — 分岐 (18・30)

下ノ廊下經由で十字峽に幕営し、樺平へ下山することにした。しかし、ルート崩壊が予想以上に進んでいたことと、体力、精神力共に薄弱であったために時間的にリスキーとなってしまう。このため、黒部ダムと下ノ廊下の分岐にテントを張り、十字峽にビバークをしに行くことにした。ところが、雪深と崩壊でこちらも予想以上にこずり、途中で時間切れ。テント場へ引き返した。なんとも後悔の残る下山となった。

19日 (晴)

出発 (7・00) — 黒部ダム駅 (8・50)

黒部ダムから樺平への縦走が課題として残った。

◆白馬岳—朝日岳縦走 (三十尾)

【期間】 8月29日～9月2日

29日 大阪発

30日 猿倉までタクシーで入り、樹林帯の登りをサクサク進む。途中、雨模様になるが、じきに止む。白馬鍾温泉小屋泊。

31日 礫とハイマツの稜線を行く。白馬三山のうち、この日は鍾と杓子を登る。鍾頂上は人が多かった。杓子か

ら眺める白馬は、特徴のある東側の岩壁がガスで覆われていた。白馬岳頂上 宿舎泊。

1日 頂上宿舎を出て、早くに白馬岳頂上に到着する。白馬山荘泊まりとみられる、ご来光目当ての客も多かった。雪倉岳避難小屋は朝日小屋の人が管理しているらしく、きれいな状態を保っていた。雪倉岳山頂はガスに包まれ、景観もなし。朝日小屋が近くころには再び樹林帯に入った。この夜はよく晴れ、空も澄んでいた。朝日小屋泊。

2日 朝日岳を經由し、蓮華温泉まで稜線上をひたすら下る。途中、湿地帯に設けられた木道は一部が濡れて滑りやすくなっていた。



御岳アイゼン合宿 剣ヶ峰で

◆冬山合宿偵察／八ヶ岳・阿弥陀岳南稜—権現岳

【期間】 11月3日～5日

【参加者】 網野、三十尾

3日 取り付きでテント泊

4日 (晴)

出発 (5・30) — 旭小屋 (6・00) — 稜線上 (6・30) — 阿弥陀岳 (11・30) — 権現岳キレット小屋 (14・30)

麓は紅葉シーズン。尾根上で1パーティートと出会った。核心部の岩峰P3までは何事もなく通過。ルート紹介の本によると、P3は巻いて側面のルンゼから登るらしいが、あえて岩峰を直上。残置支点はあるにはあるが、岩自体がもろく、全く信頼できなかった。

途中、ホルドが崩壊し、冷や汗ものであった。しかし、このちよつとした登攀で充実した1日となった。あとは赤岳を經由して権現岳と赤岳とのコルにあるキレット小屋へ。

5日 (晴)

出発 (5・30) — 権現小屋 (7・00) — 7・30 — 青小屋 (8・30) — 観音平 (11・15)

権現岳、編笠山を經由して小淵沢へ下山。

◆御岳アイゼン合宿

【期間】 11月23日～26日

【参加者】 網野、三十尾

23日 (曇)

八海山荘 (14・00) — 三笠山 (15・30) — 登山口近く 16・00

24日 (晴)

出発 (6・00) — 二ノ池 (10・30) — 雪訓 (11・00)

積雪量は雪訓に十分なほど。この日はアイゼンをはかず、歩行技術、滑落停止を中心に行った。

25日 (晴)

雪訓開始 (6・45) — 摩利支天山 周辺で雪訓中、滑落事故発生 (9・30) — BC (10・30) — 出発 (12・30) — 三笠山 (17・00)

26日 (曇) 三笠山—八海山荘 (滑落事故の詳細は別稿)

◆冬山合宿／八ヶ岳・阿弥陀岳南稜

【期間】 12月28日～31日

【参加者】 網野、三十尾

当初は阿弥陀岳から権現岳まで縦走する予定であったが、御岳での滑落事故を受け、南稜からの阿弥陀岳ピークハントだけとした。

28日 茅野までは電車。茅野駅でステーションビバークをした。われわれ以外にも2パーティーターが駅を利用していた。駅のテレビで見た天気予報によると、長野地方は翌日の最高気温が0度らしい。当然、夜は寒く、雪が一晩中降っていた。

29日 (晴)

原村ペンション上 (9・20) — 舟

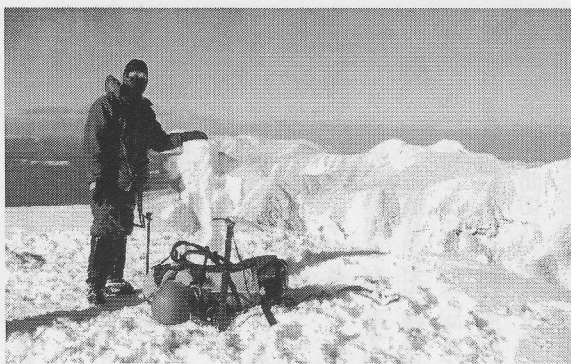
越十字路(10・30)―尾根上(11・45)
―立場山(14・15)―青ナギ手前で幕
営(14・45)

茅野駅で一緒だった2パーティー
はタクシーで行ってしまった。われわ
れはバスを利用した。舟越十字路で数
パーティーと出会った。前夜の降雪で
トレースはないと予想したが、先行パ
ーティーがいたようで、この日はトレ
ースをたどっていけばよかった。

30日(晴)

出発(6・00)―無名峰(7・30)
―阿弥陀岳(14・00)―行者小屋
(16・00)―幕営(16・30)

無名峰前からトレースがなくなり、
ラッセル。積雪は腰から胸まで。無名
峰からP3までは先行パーティーに追



冬山合宿 阿弥陀岳頂上

いつき、代わる代わるラッセル。稜線
上は予想通り風が非常に強く、ロープ
ワークのコールが聞き取りづらく、時
間をとられた。P3は側面のルンゼを
詰めた。待ち時間が非常に長く、三十
尾が指先に凍傷を負うことになった。
阿弥陀岳頂上からは一般ルートを下
降し、行者小屋を経由して美濃戸口方
向にしばらく行ったところで幕営。

31日 下山

出発(4・00)―美濃戸口(6・30)

御岳アイゼン合宿事故報告

〔合宿の目的〕雪上技術の向上

〔参加者〕

網野善久(理学部生物学科4回生)

三十尾誠(理学部化学科2回生)

〔事故発生日時〕11月25日午前9

時31分ごろ。

〔事故の場所〕摩利支天山南側斜

面

〔事故内容〕斜面をクライムダウ
ン中に三十尾が滑落。下にいた網野と
衝突し、網野も滑落。

〔発生状況〕

▽発生前 7時30分頃から摩利支
天山南側斜面を利用して急な雪面を登
下する練習を始めた。

▽9・30頃、摩利支天山の稜線か
ら南側斜面方向へルンゼ状の雪壁をク
ライムダウン。斜面の角度は60度ほど、

ルンゼは幅1mほどで浅い。雪質は
アイゼンを着けてのキックステップが
よく決まるものだった。網野が先にク
ライムダウンし、ステップをつけた。
7分ほど下降して、そのまま待機。
続いて三十尾が正面を向いて(クライ
ムダウンではなく)下降。途中、クラ
イムダウンに切り替えようとしたとこ
ろ、ステップから足が外れて滑落。下
にいた網野と衝突した。その後、2人
とも方向を異にして滑落。

▽以下、現場のピッケル、滑落の
跡、本人の記憶から滑落の様子を推測。

三十尾にすぐに滑落停止姿勢に入
ったが、そのまま10分ほど滑り、雪
に埋もれた岩の頭に2回衝突し、テラ
ス状の場所で停止。

網野にピッケルが手から離れ、頭
を下に仰向けで滑落し始め、30分ほ
ど滑落してピッケルストップで停止。

〔発生後の処置〕

網野のけがは口の上を切った程度
で、軽いもの。三十尾の所に行き、状
態を聞くと、膝と脛を打ったとのこと。
見ると、膝と脛に擦過傷、腫れがあっ
た。擦過傷には消毒をし、絆創膏を貼
った。10・00に二ノ池横のBCへ向け
て移動開始。三十尾は足を引きずりな
がら歩いた。10・30BC到着。その日
のうちにできる限り下山することにし
た。共同装備は網野が持ち、12・00二
ノ池を出発、17・00田の原近くに到着。

三十尾の右膝は腫れがひどくなってい
た。

翌朝6・00に出発し、10・30八海
山荘着。11・00頃タクシーに乗り、木
曽福島駅に12・00前に到着。そのまま
大阪まで帰り、三十尾は自宅近くの病
院へ行った。

〔けがの経過〕

27日、三十尾から「レントゲン検
査の結果、骨に異常はなく、打撲・捻
挫のよう」と連絡をもらった。

〔事故原因〕

正面を向いての下降からクライム
ダウンへ姿勢を変えようとしてバラ
ンを崩したことが直接的な原因であろ
う。しかし、下降前に三十尾は正面を
向いて下降すると網野に伝えていた。
従って、網野の認識の誤りと両者の気
持ちの緩みが根本的な原因だと思われ
る。また、三十尾が滑落停止の姿勢を
すぐに取っていたことから、網野が直
下にいなければ、けがなく止まってい
たかもしれない。

〔今後の課題〕

事故を起こさなかったために技術の向
上をはかることはもとより、事故を起
こした場合の応急処置、搬出救助の知
識、実際の練習をしていかなければなら
ないと思われる。今後の山行について
は肉体的、精神的な面を考慮しつつ決
めようと思つた。

会員の近況

白馬集会や新年会の出欠はがきなどから抜粋しました。その後の変動などは未確認。卒業年次順。敬称略

京極与寿郎 (工17) 山岳部の諸先輩、同期生が次々世を去り、淋しいことです。86歳になりますが、元気にしています。

大久保勝己 (医23) 山もスキーも随分ご無沙汰でございます。お蔭様で元気でやっており、最近絵を習ったりしております。

加藤 幹太 (理27) 昨年9月、故徳永君の七回忌の墓参に行き、故人を偲びました。田島、山本、細見君らと会食できたのは楽しいことでした。私は元気にしていますが、体のあちらこちらとケアすることが多くなつて年齢を感じています。

久保 三朗 (工27) 知らない所、まだ行つたことのない所へ行きたいという気持ちはなくしていません。いつもですが、運動能力の衰えとの兼ね合いで、やはり遠慮しようか……の多い昨今です。そんな中、ここ二、三年で、園部、津山にはほぼ並行する日本海、瀬戸内海の分水嶺—JAC 関西支部で手分けして全走破—のうちの30%ほど、それから南奥、雲

取への機会を得て、50年かかった吉野、那智を達成。その延長で、これも支部で四国へも。11月末の剣山と石鎚山の間での吉野川横断、すなわち大歩危前後での背稜上下など、応分以上に楽しませてもらっています。

田島 汎 (経28) 相変わらずのサンデー毎日。何とか元気で、たまには六甲辺りへ。正月は年中行事(二人で勝手に)で京都・愛宕山へ。しかし、だんだんしんどくなつてきて来年はどうかいなと思つてるところです。

堺谷 弘 (理28) 昨年5月にはマウンテンバイク(自転車)で東海道五十三次を走り、東京まで行きました。26日かかり、19日は野宿、ホテルで6泊でした。今年は芭蕉の奥の細道(東京-仙台-山形-新潟)をやる予定です。

奈良県明日香村で9月に行われる萬葉歌の作曲コンクールに応募すべくコンピューター作曲にも取り組んでいます。また、昨年7月に8件目の醍醐味酒(牛乳/糖分/アルコール分/炭酸ガス)の特許を出願しました。

住吉 仙也 (医29) 年齢相応に元気で。しかし、検査をすると、いろいろ異常があります。自覚症状は全くなく、たばこ、酒も毎日。今までの通りのわがまま、怠惰な毎日です。

人生50年の時代に生まれたので、30年は余分で、異常は当然でしょう。

大村 一生 (理29) 可もなく不可もなく、平々凡々と暮らしています。ただ、だんだんと長道が困難になり、さびしい感はぬぐえませんが、雪山を見ても懐かしいばかりです。

二木 節夫 (工29) 脳出血後の家内のリハビリテーションに参加し、買い物、料理を二人三脚でやっています。毎日、忙しい限りです。私も数年前から腰と膝の調子が悪く、楽しみにしていた登山とゴルフがほとんどできない状態です。昨秋ごろから若干良くなつてきた気がしますので、今年は希望の持てる年であつてほしいと願っています。

横井 保枝 (文31) 冬はスキー、夏は登山が、もうしばらく続けられればと願っています。昨年のフランスでのスキーはとても楽しかったですが、今年は国内です。

宍戸 元 (医32) 本年は必ず白馬集会に出席するつもりです。毎日、相変わらず仕事をしています。電車でも誰も席を譲ってくれません。

石澤 命久 (歯32) 昨年10月、白内障の手術を受け、運転免許更新も無事済ませ、裸眼で運転している。歯医者の方は月水金の午前中だけに限り、大変楽になった。スキーのためめの老人のトレーニングは難しく、

だましましやらないと腰痛などが出てくる。まあなんとかスキーに行けそう。

田村 俊秀 (医38) 平成17年に退職し、臨床医として再出発しました。ただ今、奄美大島の離島、喜界ヶ島病院に勤めています。若者は島を離れ、高齢化が深刻です。

昨春秋、さるNPOに参加してカラコルムに行きました。山岳地帯の住民は眉目秀麗で青い目をしていますが、何とチベット系の言葉と生活様式のうへ、シア派イスラム教徒でした。チベットの寺院で、イラン系の村人がメッカに向かって礼拝していました。

梶本 孝治 (工38) 昨年、動脈解離でドクターストップをかけられ、静養中です。その後、症状も安定して、春めいてきたら、我が家の奥庭の六甲山をリハビリに歩き出したと思つています。昨年末、岳父が亡くなり、明治の頃から中国・上海にて事業(小商売ですが)をしてきた家に生まれ育つた記録メモなどが出てきたので、それらをつなぎ合わせ、空白の明治、大正、昭和の上海の歴史メモを編さんしようとして取り組んでいるのですが……。

宇野 雅明 (医39) 昨年夏はカナディアンロッキーを1週間、満喫しました。もっとも、麓をうろうろし

ただけです。

大川 和秋(工39) 先輩の宮本真雄さんが(勤め先の)シャープが開発した市販前のハンデイトランシーバーを貸してくださったのが昭和38年。それと比べて、今の携帯電話の普及に革命的なものを感じます。種々の自然界の現象を観察し、記録するのに必要な変換素子の開発、小型化。山のみならず、自然現象にもいろいろと挑戦したいと意欲は持っています。本年はドイツの旧友たちからテニスの挑戦を受けており、夏にっばいはドイツに乗り込みます。

木原 秀幸(工39) 幸い、元気に毎日を過ごしています。体力維持のためスポーツクラブで水泳と筋トレを少しやっています。また、月1、2回、六甲山で自然案内ガイドとしてのんびりウォーキングを楽しんでいます。仕事の方はボケない程度に少しだけ……。

昨年は家内と2人で1カ月余り、ニュージールランドへ。ナショナルパークとトレッキングの旅を楽しみました。今年も冬は北海道でスキーを、夏もどこかへ行きたいと思っています。

桑原 昭夫(工40) まだ66歳。明日に向かって働いています。勤務先は大坂・曾根崎、お初天神の近くです。

高田 邦雄(経40) 心臓冠動脈バ

イパス手術から、今夏で満3年。弱った脚を鍛え直そうとウォーキングに励む毎日ですが、現状維持が精いっぱいなのです。それでも昨夏の白馬集会后は平湯温泉から乗鞍岳(3,026^{ft})に登ってきました。ついでに過去に登った3,000^{ft}峰を調べたところ、残るは木曾御岳(3,067^{ft})だけということが分かり、「次は御岳へ」と機会をうかがっています。

岡田 謙治(法44) 登山はさっぱりですが、スキーはしっかり続けておられます。

上松 一雄(工50) 長年勤めた三菱重工業から、関連会社のRSGに移りました。相変わらず三菱重工業のサポートをして充実した日々を過ごしています。

井上 太一(理50) 一昨年のスペイン西北部サンティアゴ・デ・コンポステーラへの800^{km}巡礼旅行(ピレネー北から38日間徒歩)のあと、宗教学人カトリック東京大司教区の法人事務部に就職し、17の幼稚園の経営をみています。

昨年春にはエジプトを旅行し、皆既日食を観測してきました。いちばん下の子どもが大学生になり、これから人生を楽しむつもりです。

大宅 幸夫(歯51) 相変わらず、

事務局からお願い

会員の皆様には毎年、会費納入にご協力いただいておりますが、近年、納入遅延、滞納が目立ち、事務局は困惑しています。総会報告に添える資料が示すように、山岳会会計はすでに支出が収入を上回り、過去の繰越金を取り崩す事

態に陥っております。

今後、会員数増加は望むべくもないことから、このような状況が続くと、会務や現役の活動支援に支障が出る恐れがあります。どうか窮状をご理解のうえ、会費納入にご協力いただようお願いいたします。滞納されている方は一括納入していただければ幸いです。

夏は沢登り、冬はスキーというワンパターンを続けていますが、だんだんしんどくなっています。(昨年)の連休は梅池・乗鞍・蓮華温泉―雪倉・蓮華温泉―小蓮華(金山沢)―猿倉のコースでしたが、若い人に追い越され、バテバテでした。

後藤 正教(法54) 長年の自転車通勤(片道11^{km})が原因か、前立腺の調子悪く、かつ、土、日の力仕事(椎茸の原木運びなど)の影響か、腸ヘルニアが出て、薬を飲む毎日です。やはり年ですね、体力に自信を失っております。

藤田 繁雄(医・平成3) 昨年8月から南紀白浜の近く、田辺市にある紀南病院におります。大阪と違って医師不足が深刻です。周囲の外科も手術しなくなり、車で2時間のエリアが守備範囲です。冬の間山へ行きたいです。劔岳はどんな表情なのでしょうが。

佐藤貴美子(医・平成13) 昨年11月に長女を出産。育児を楽しんでいます。子どもが歩けるようになれば一緒に山を散策できることを楽しみにしながら!

渡辺 景子(基礎工・平成17) 院生で在学中ですが、なかなか卒業できません。山も登るものではなく、写真で眺めるものになってしまいました。

編集後記

この欄などで「原稿不足で困っている」と訴えたら、さっそく2氏から寄稿の申し出がありました。特に大宅氏の台湾の谷歩きは新鮮な内容です。引き続き意欲的なご投稿をお待ちします。随想、山行報告、紀行など何でも歓迎します。

(会報担当・高田邦雄)